

# 群馬大学教員養成課程での動物飼育に関する授業内容の紹介

桑原保光

群馬大学教育学部では生活科研究実施委員会 15 名で各専門分野を執筆し教科書を作成しています。その中の飼育講座について授業内容の概要を報告します。

私が担当する飼育は「楽しい飼育と動物介在教育」と題して小学校教員を目指す学生に飼育の実際についての講義と、ウサギとの動物ふれあい実習を行っています。

学校の飼育動物はウサギと鶏が多くの小学校で飼育されています。特に飼育する動物種の指定は無く、生活科の創設により教科書に載っているのを飼っていると言った消極的な意味で飼育され、なぜウサギか、なぜ鶏なのか共通理解がなされていません。また、学校として飼育管理や衛生費など予算的な配慮が十分でなく、飢えや渇きなどの飼育環境の悪化から病気になる動物もいます。獣医師の立場からすると改善のスピードが遅く目を覆いたくなる場面もあります。この現状を変えるために平成 12 年から非常勤講師として教壇に立っています。

学校飼育動物の対応や飼育管理指導については、平成 14 年に改正された新動物愛護法の制定に伴い、環境省から告示された「家庭動物等の飼養及び保管に関する基準」には「学校、福祉施設等の管理者は、動物の飼養及び保管が、獣医師等十分な知識と飼養経験を有するものの指導の下に行われるよう定め、本基準の各項に基づく適切な動物の飼養及び保管並びに動物による事故の防止に努めること」とあります。学校で飼育するからには、これに対する適切な対応が必要です。

飼育の意義目的や学校飼育動物の考え方の統一や指導法について、どのように飼育するか、どんな動物を飼育するかについて、文部科学省の「学校における望ましい飼育の在り方」の指導書を中心に具体例を示し講義を実施しています。

生活科飼育では 2 年間に渡り継続的飼育を「少ない動物を身近において丁寧に最後

まで飼う」を飼育の基本として展開し、子どもが「動物と仲良くなる楽しさを教える」動物ふれあい体験指導や、動物が苦手な子どもの対応方法とアレルギーを持つ子どもの役割等、クラスの子ども全体で取り組める指導を講義しています。また、飼育を開始する時の動機付けや温かい血のかよった動物から生きていることを認識し、動物の気持ちを理解して世話ができるように、気付きの質の向上や言葉掛けのタイミング等が適切に指導できるような講義も行っています。また、飼育の実際に関連する、動物由来感染症の予防、アニマルセラピーと動物介在教育の実施方法など小学校に赴任の際に実践に役立つ飼育の実際について講義と体験実習を中心に授業を展開しています。

学生の反応については、学校になぜ動物がいるのか飼育の目的を理解できた、ウサギを初めて抱けて嬉しかった、教員に採用されたら教室飼育を実現したい等の感想がありました。また、飼育委員会に所属していた学生は、学校の対応に疑問や病気の処置に心を痛めた当時の思いを語り、過去の飼育動物の課題が今も続いていることに嘆いていました。今後の学生諸君の活躍を期待しています。

---

## 楽しい飼育と動物介在教育

### はじめに

家庭での動物飼育の現状は、ペットからコンパニオンアニマルという呼び方が広まり、今日では多くの動物が家族の一員として迎えられ、人と動物の関係がより密接になってきました。その一方で、人と動物の関係や動物に対する社会の受け止め方や、動物飼育に対する考え方は多様化し、個人の動物観にはいろいろな違いが見られます。

動物愛護管理法（環境省）では、動物愛護

の普及啓発推進のための教育活動が行われる場所として「学校、地域、家庭」と明記され、飼育動物を通じた情操教育を、学校や地域、家庭が中心となって推進していくことや、「家庭動物等の飼養及び保管に関する基準」で、学校・福祉施設等における管理者の飼養および保管に係わる義務も規定されています。健康な動物との正しい接し方や、衛生的な飼養管理について動物の習性をよく理解した上で適正に飼育することとなっています。また、教育関連施設での動物飼育のあり方を基準に沿った形で実現するために専門家や獣医師との連携が必要としています。

学校での飼育動物の飼育方法や衛生管理は動物愛護や福祉の観点からも配慮が必要で、統一した飼育管理基準で飼育することが望まれています。また、学校の動物は、「生物観察の単なる教材」という物的な考え方から、「子ども達にとって生きた仲間」として「動物の命を預かる」ことを意味することと考え方も統一して、かけがえのない「いのち」を意識する契機と捉えて総合的な指導が期待されています。

動物飼育の実際については、教師が目的に応じた動物種や性格を考慮した上で選択し、どのように飼育するかといった動物飼育に関する知識を高めて、子ども達の気付きの質の向上のために問いかけをしていき、動物に関する新たな発見が興味関心を深めていき、指導案を工夫し生活科の動物飼育を2年間にわたり実施し、あたたかい血の通った動物とのふれあい体験は、子ども達に生き物を実感させ動物と仲良くなる楽しさを感じ生きる力を身につける基礎的な命と心の教育として取り組んでいきます。

## 1 学校飼育動物の意義と目的について

### (1) 動物飼育と命の教育について

いろいろな経験をさせたい、これは大人が子どもにさせてあげたいと願うことのひとつであります。特に命にかかわる経験はなかなかできるものではないでしょう。命、それは人間にとっても、動物にとっても重いものであります。動物を飼って生死を体験することは、子どもにとって貴重な経験



になるという考え方がありますが、ただ動物に接して、動物の生死を経験してもそれは有意義だったとは言いきれないと思います。校庭の片隅であまり世話もされずに息絶えてゆく動物を見て良い経験をしたとは言えません。

命は覚えるものでなく、感じとるものであり幼児期にウサギを触らせると多くの子どもがウサギを両手で抱えて頬擦りをして全身で感じています。

生活習慣の一部として動物の世話をし、その動物と同じ時間を過ごしたからこそ、その動物に対する思いと、愛する動物が亡くなったときに、初めて心の苦しさが「かけがえのない命」を認識し、その生死は子どもにとって有意義な経験になるはずで、大切に世話をした生き物が病気になりその命をなくした時、人は初めて深い悲しみとその命の尊さを実感することとなります。楽しいこと、悲しいことは、世話の期間と思入れの深さに比例しているはずである。

命の大切さを知る 生命尊重の精神には、バーチャルではなく実体験が不可欠です。

子どもたちが生き物と触れ合い、遊び、観察し、世話をする上で、自分たちと同じ命を持っていることに気付き、その中で、生き物の変化や成長の様子に関心を持ち、生きていることの大切さを理解する必要があります。時には失敗を経験することもあります。それも命を考えるひとつのきっかけとし、その場合教師は必ず原因を究明し指導する事が重要で、大人がその時に正しく行動することによって命を伝えることが可能になると考えています。

### (2) 動物とのふれあいが心を育てる指導について

子どもは動物を飼うこと自体が学習で、

動物を飼いながら「どんな場所が好きかなあ」「もっと上手に育てたいな」などの願いを持ちます。そして、飼っている動物の好む環境を調べたり整えたりすることで、継続的で身近な飼育が、子どもの心に響き動物が可愛いくて放っておけない存在となり、世話は大変だけれども可愛いから休まず世話をするようになり、自分の役割を理解し優しい心遣いが生まれてきます。このような動物との出会いは感性を揺さぶる実体験になり、相手の立場に立った見方や考え方が出来る様になり気付きの質が高まるようになっていくでしょう。

子どもの心を育てるふれあいには、動物が可愛いと思える環境を作ることが必要で、飼育舎が不衛生であったり、子どもの年齢や体力に合った動物を選択したりしないと、飼育が重荷となり世話が行き届かなくなります。臭い、汚い、が先に来て嫌になってしまいます。また、言葉がけも大切で「よく世話ができたね」「いいことに気が付いたね」と褒めてあげれば、より深く興味関心を持ち、責任を持って世話をするようになります。

子どもの発達段階によっては動物との接し方や感じ方の意義が違ってきます。小学校低学年では、動物とふれあい遊びの中で、動物に命があって人と同じに成長していることに気付き感動します。中学年では、心臓が動いているなど科学的な視点を持ち、生命の尊さを感じ取り、命のもたらす価値への気付きで、生きていることの思いを実感します。高学年になれば、生命がかげがえのないものであることを知り、自他の命の大切さを自然と身に付け、動物を可愛がり守ろうとする養育心の育成や人格形成にも関わっていきます。

### (3) 動物飼育が人に与える効果について

動物とのふれあいは、学校や家庭が抱える課題解決の糸口にもなります。不登校の子どもが「ウサギに餌をあげに学校に行ってみようか」と言う言葉がけで、学校に行くようになった例もたくさんあります。普段乱暴な子が動物に優しく接しているのに教師が気付き、みんなの前で優しく褒めたら、それを機にクラスの子どもたちの見方も、

本人の行動も変化したということがありました。ウサギが怖くて抱けない子どもに、ウサギと楽しく遊ぶ子どもの様子を観察させ言葉がけをすると、タオルを使うと次第に抱けるようになります。また、言葉遣いや、自律的行動、役割、道徳判断など多種多様な行動についても、観察学習が成立することが明らかにされています。

2007年に発表された研究調査では、小学校4年生で動物飼育を経験した子どもは、バスや電車でお年寄りに席を譲るなど思いやりの気持ちが強まることや、家庭での飼育体験のない子どもが学校で動物飼育体験をするケースでは、社会性や思いやりの行動の意識が高まっていたことが分かりました。また、我々が2010年に教室動物飼育が子どもに与える教育的効果の調査では共感性や向社会性、自尊心感情に有意差が認められました。

人は動物と共に暮らすことで心の潤いや安らぎが得られ、疎外感、孤独感から開放されます。さらに、動物を世話することで、生活へのほりや内面的満足感が、生きることへの新たな喜びとなる気持ちが生まれ、人の心と体に好影響を及ぼすことが実証されています。

## 2 学校飼育動物の現状と課題について

### (1) 飼育環境の課題

学校で生き物を飼うということは、動物の苦手な人にとって想像以上に大変なことであります。まして、動物が怖い、咬まれそうで不安、臭い、不衛生と感じている子どもが学校の決められている飼育舎で限られた時間内に、その動物が快適でリラックスした生活を送らせるには、それ相当の努力と工夫が必要になります。飼育委員会の子どもでも動物をゆっくり観察し遊んだりする時間と余裕が無く、機械的に餌と水を与え掃除をして飼育当番が終わってしまう。多くの学校の飼育舎は家畜飼育用と展示型飼育舎の特徴を持ち、複数の動物種が同居する多頭飼育が行われています。昔の動物園がそうであったように展示型観察飼育方法が主体で、外から見て楽しみ観察できること

を目的として作られたようでありますが、生活科では、子どもの視点に立って現状の教育計画と飼育形態を見直し教室内飼育を実施することが望まれています。

(2) 動物に対する子どもの思いの理解について

小学校での動物飼育は、動物好きな子どもでも学年が上がる毎に興味関心が薄れていく傾向があり、身近での飼育が実施されていないため、学校の動物と割り切り自分の感情を抑えてしまう状況が見られます。また、子どもの動物に対する興味関心や可愛いと感じ、愛情を持って飼育したいと希望している純真な気持ちが見過ごされているかもしれません。さらに、動物の苦手な子どもの対応や適正飼育管理指導を欠いていると、飼育自体が負の効果として悪循環を繰り返している学校もあります。このような状況を早く改善するために、文部科学省が全国の小学校に配布した「学校における望ましい動物飼育のあり方」日本初等理科研究会発行を、改革の指導書とし参考にして下さい。

(3) 動物観と認識の開きや学校飼育動物の考え方の統一

現在の学校での飼育は愛玩動物と家畜や鑑賞用動物の多頭混合飼育が行われ、教育目的と教材動物に対する配慮が欠けている学校があります。それに加えて個人の動物種に対する認識の差が大きく、例えば年代や職業によるウサギの認識は増やして売る、毛皮に利用する等、生産性を追求する家畜と考えている人、犬や猫に代表されるペットと同様に愛玩動物と認識する人がいるように学校では統一された見解で指導が行われていないことがあります。本来飼育は目的により飼育舎と飼育方法が大きく変わるものです。学校での哺乳類の動物飼育は愛玩飼育の本質から外れると問題視される傾向にあります。

飼育だけでなく理科の解剖実習、生物実験、昆虫採取等においても、動物愛護の精神や動物の福祉の観点からも共通認識を持たないと教育計画の幅が大きく難しさを感じさせる要因となっていると思います。



ウサギとチャボの多頭混合飼育

(4) 子どもと動物の望ましい関係について

生活科での子どもと動物の理想的な関係は、子どもと動物がお互いに触れ合い楽しい時間を過ごすことから始まります。人に慣れてリラックスしている動物と遊ぶことは楽しいもので、人が近づくと、嬉しそうにそばに寄って来るような動物と飼育体験をさせたいです。できるだけ人に慣れて、触れられてもストレスをそれほど感じない動物を活用することが望まれています。

動物との触れ合いを繰り返すことにより、子どもは動物の様子や動きを良く感じ取り、相手が喜んでいるのか迷惑しているのかを判断し、それに対応した行動や先を予測した行動が多く見られるようになります。このように、動物とふれあいや遊びを通して、動物の動作や息吹、柔らかさ、暖かさなど、命を感じると共に動物個体の性格や動物種の習性や特徴なども理解できるようになっていきます。

継続的な飼育活動から動物に対する愛情が生まれ放っておけない存在になり小屋の掃除や、世話は大変だけれど「うさちゃんを大事にしたいから、お掃除を一生懸命するよ」と責任を持って世話ができるようになります。ゆとりのある息の長い活動を設定することが、生活科の生命に関する教育には必要です。

(5) 動物飼育は何のため？

ある学校の飼育委員会活動で、話をしていた時のことです。その日は、「なぜヒトは動物を飼うのだろう」という題で、飼う側と飼われる側の、良い点、問題点、などの話を

していました。話が学校の動物に及び、「どうして学校にウサギがいるのだろう」と聞くと、ある子どもから「給食の残りを食べさせるため」と答えが返ってきました。皆さんはこの話を聞いてどう思われますか。もちろんすべてではありませんが、学校の多くの現場では、大きな飼育小屋に、たくさんのウサギや鶏が放し飼いにされ、飼育委員会の当番さんと、飼育担当の先生が、休み時間に忙しく、世話をしているのが現状です。世話は飼育委員に限定され、他の子どもは飼育小屋に入ることはもちろん、餌を与えることもできません。飼育委員も動物たちの、水を取り換えたり、餌をあげるのに手一杯で、動物をゆっくり観察したり、動物と遊んだりする時間と余裕はありません。動物の方は、多頭飼育が原因でウサギはなわばり争いの結果、耳や皮膚に咬み傷や、強い雄や雌におしっこを掛けられ毛が茶色くなったりします。鶏は強いオスにつつかれて羽が抜け、頭や尾から血を流していることが見受けられることもあります。残念ながら学校での飼育方法は、予算不足や考え方の違いで、動物を飼ってリラックスをするという愛玩飼育の本質から外れていることが多く、そこに飼育の難しさを感じる教職員も多いかと思えます。

### 3 生活科飼育と動物介在教育について

#### (1) 生活科継続飼育の内容について

飼育や栽培の過程では、新しい生命の誕生や突然の死や病気などに、命の尊さを、身をもって感じる出来事に直面することもあります。また、動物の成長することの素晴らしさや尊さ、死んだり枯れたり病気になったりした時の悲しさや辛さ、恐ろしさは、子どもの成長に必要な体験であります。

動物とのかかわり方を真剣に振り返り、その命を守っていた自分の存在に子どもが自ら気付く機会ととらえることが大切であると思えます。

動物の飼育に当たっては、管理や繁殖、施設や環境などについて配慮することが必要です。その際は、専門的な知識を持った地域の専門家や獣医師などの多くの支援者と連

携して、よりよい体験を与える環境を整えて下さい。

#### (2) 動物介在教育とアニマルセラピーについて

アニマルセラピーとは、Animal assisted activity (AAA)動物介在活動と、Animal assisted therapy(AAT)動物介在療法に分類されます。AAAは、訪問型、在宅型、野外型のあらゆる場においてある一定基準に達した動物とその飼い主であるボランティアと受け入れ側の専門家やスタッフなどによって行われる活動で、老人ホーム等の入居者や入院患者などの生活の質を向上させ、情緒的、教育的、レクリエーション的、そして、時には治療的な効果をもたらす機会を与える活動です。AATは、医療上診断がつき治療のある部分で、動物が介在することでより治療効果が期待できると認められた治療法です。広義のアニマルセラピーは動物と飼育者が主にふれあい、一緒に生活することで癒し効果などが得られることです。

近年『人と動物の関係に関する国際会議』で犯罪の低年齢化や凶悪化は世界中で大きな問題とされ、心の育成に照準を合わせた教育の必要性が求められています。その1つの方法として注目されているのが動物介在教育 Animal Assisted Education(AAE)です。学校での教室内動物飼育で子どもの心の育成を図る為の方法で、広義のアニマルセラピーの新しい分野として期待を寄せられています。

#### (3) 生活科等での動物介在教育（教室内飼育）の基準作成について

学校教育に介在する動物は、動物の福祉と子どもへの配慮と適切な方法で飼育され、健康でおとなしく、子どもによく馴れる事が第一条件です。また、生活科の飼育計画指導案は教室や校舎内等で日常的に飼育する事を前提としています。人と動物の関係と児童心理の観点から、教育関連施設によって飼育される動物は飼育目的別に動物種や品種性格等を考慮して動物別に選択基準と飼育管理基準を作成し飼育を開始することが重要と認識されています。

以下、基準作成時に参考となる事項と飼育備品を示します。

- ① 学校と保護者の両者が AAE の重要性和意義目的について理解しアンケート調査を実施する。  
子どものアレルギーなどについても、事前に保護者に尋ねるなどの対応が必要です。
- ② 指導案と目的を定義して事前、事後、系統学習に発展させる。
- ③ 獣医師等の専門家の指導下において飼育目的を明記して実施する。
- ④ 介在する動物が健康で温かな性格を持ち子どもによく慣れていること。
- ⑤ 学級内の子どもの健康や感情を尊重し、年齢に適した動物種を選択する。
- ⑥ 教室内の匂い、泣き声等が授業の悪影響にならないような品種を選択する。
- ⑦ 子ども一人一人が飼育体験に関わっているか、感情の表し方の違いや、アレルギー等を考慮し、子どもと動物との距離間に応じて自主的な体験を重視しながらも、個別指導を行なう。
- ⑧ 休日は当番制で動物を家庭に持ち帰り、家族の一員としての飼育体験を実施する。
- ⑨ 1年生で飼育に慣れたら、2年生では1週間単位での当番制にする。  
グループ飼育（5～6人）も検討してみる。
- ⑩ 学校と獣医師が動物の健康管理、適性、手入れの状況等を定期的にチェックし指導を行う。
- ⑪ 飼育年限の決定と教育計画終了時の里親探しと、動物の老後の対応を子どもに考えさせる。  
教育計画による飼育年数の規定を作る。（生活科飼育は2年時で終了、最長でも6年間とし子どもと一緒に卒業させる計画でスタートする。）高学年の飼育委員会活動とは別に考える必要がある。
- ⑫ 飼育ケージの広さの定義を作り、消臭作用のあるトイレ用品を使用する。
- ⑬ 獣医師と連携し、動物の定期健康診断

の実施する。

投薬方法、外傷手当、動物の手入れ方法、飼育管理方法等のマニュアルを作成する。

- ⑭ お勧め飼育用品 清掃がし易く軽いものを導入する。

#### 【参考飼育用品】

写真①～⑧ケージ・寝箱・トイレ・給水器・えさ入れ・牧草入れ】



① 室内用飼育ケージ



② 引き出しトイレ付き



③ 外付け固定式給水器



④固定式トイレ（消臭用トイレ砂）・フード入れ・牧草入れ



⑤牧草 不断給餌（チモシー）切らずに長いまま与える ⑥消臭効果のあるウサギ用トイレ砂

## 5 生活科における動物介在教育（教室内飼育または校舎内飼育）の具体的な指針について

動物飼育教育では目的と役割により、動物種の習性と特徴を理解した上で動物を選択する必要があります。生活科から始まる教科指導の中で、飼育栽培の年間計画としてその動物の餌として適した植物の種まき等の系統学習から道徳、理科、総合学習、食

農教育、地球環境教育などの高学年の教科に展開させる実践指導の確立と研究が必要であります。また、動物の生活と一生をテーマに、交配、妊娠、出産、育児から親の世話や高齢動物の世話など、一貫した計画指導が望まれます。

(1) 目的に合った動物種の選択と指導について

小学校低学年では、学年や体力に応じた動物種と品種の選択が重要で、生活科の飼育体験が動物嫌いの原因にならないよう教育的配慮が必要です。生活科の動物飼育において、親代わりになって世話することにより動物はその子どもを頼り懐いてきます。その過程で子どもは動物への豊かな感情や、やさしさ、思いやりといった気持ちが芽生え、このような愛情飼育指導を目的に動物を導入します。また、動物種は温和な性質で人に良くなつく小動物を選択することが望ましいと考えています。

教室内飼育に適した動物は、ウサギの小型品種のホーランドロップ（去勢した雄が最適）、ネザーランドドワーフ、モルモット、鳥類では愛玩鶏プチッコ、手乗り鳥類等の、平均寿命2～8年の動物から選択すると良いでしょう。教室内動物飼育の目的別選択基準を参考に導入するとより良い効果が得られると考えています。これらの動物は導入時に費用が掛かるが餌代や排泄物が少ないので室内飼育に適しています。

(2) 子どもの動物観について

小学校1～2年生の子どもに「ウサギの好物は何？」と問いかけると、声をそろえて「ニンジン」と答えが返ってきます。本当に



ニンジンが好きなのかは疑問で、絵本やテレビで得た情報が先入観（日本人の動物観

の特徴)として現れています。事前学習として、飼育栽培を兼ねてウサギの好物と思える野菜や植物の数種類の種まきも同時に行い、ウサギの教室飼育計画で興味関心の相乗効果を目的にウサギがクラスにやっ



来る頃に収穫を合わせ、好物を実証してみる計画を立てることで充実した指導を行えます。

こうした計画は中高学年においても同様で、食糧になる植物や野菜を作る楽しさや大変さを体験し、収穫した物を平等に人や動物に分け与える試みも行ってみたいです。人と動物の食物と食べ方や体の仕組みの違いに気付かせ、動物が食べる様子を観察する時に「おいしそうに食べているね」「手作りで栄養満点の野菜で嬉しそうだね」「残さず食べてくれて良かったね」など誉め言葉を必ず掛け成果を評価することが必要です。全体から見た自分たちの仕事と役割の大切さや責任感を感じさせ、飼育栽培の喜びを心と体で体験できる計画を立て実施しましょう。

#### (3) 交配、妊娠、出産の計画的な指導

学校の飼育体験では、生活科でウサギの交配、妊娠、出産の過程を教師主導計画で経験させ、中高学年では理科、道徳、総合学習等で課題を出して自主計画を作成し体験させことも考えられます。事前学習で、交配はどのようにするのか、何のためか、生まれた動物はどのように育てるかを指導することが大切です。そして、妊娠期間、出産の時期、場所の準備をどこにするか、出産の様子を観察、離乳や躰計画、新学期に向けて4月頃に2ヶ月令の仔ウサギがいる計画など、幅広い視点での指導もできます。また、自分たちの計画案について獣医師に相談し指導

を受け、いろいろな体験を考え調べ期待と不安のなかで大きな想像力とロマンをいだかせる指導もできるようになります。

ウサギの性周期のサイクルは短く年3-4回の出産が可能であるため、命の不思議さや神秘性、多様性などを実感する有意義な感動体験が計画的に実施する事が可能になります。

#### (4) 飼育と管理指導計画について

ウサギの愛情飼育体験計画では生後から2ヶ月令までが躰の適期で仔ウサギのかわいらしさを一番感じさせ、繁殖に携わった人だけが味わえる楽しさがあります。観察と触れ合いの過程で子どもに好印象を与え一生忘れられない良い経験となるでしょう。仔ウサギの性格判断をしながら社会化と順

#### 生後5日齢のウサギ

応のための躰を行い、クラス内飼育を実施するのに適性がある個体を獣医師に相談して選択すると良いでしょう。飼育する動物個体が決まったら、事後学習で似顔絵を書き名前をつけて掲示すると、愛着や親近感が日ごとに増しクラスの話題の中心となります。事前学習の中で学校の飼育頭数を一定以上から増やさないことや里親を決めておくことも必要です。世話の仕方を勉強しながら動物の習性や特徴も理解し、飼育方法もだんだん馴れて余裕が出てきます。その過程で休日や長期休暇を利用して飼育動物を家庭で飼育体験をする「学校飼育動物ホームステイ飼育活動」などの飼育計画を実施して行きましょう。

#### (5) 食育教育について



人間は、生き物から様々な恩恵を受けて生活しています。子どもは動物を育てながら楽しく遊び、命を育む驚きや喜びを深め、心も癒される。また一方で、人間も動物の一種で生き物の大切な命をいただいて生活しています。「命と食」を考える食育（食農）教育の重要性についての指導が必要でしょう。

毎日の食生活の中で、感謝の気持ちを大切に「ありがとう」「いただきます」「ごちそうさま」を忘れないような指導をしたいものです。食育教育は、それは、今を生きるものと、生かされるものの「命と心」をテーマにしたひとつの動物介在教育であると考えています。

人間は動物を愛し慈しみを持って飼育している反面、家畜として食べるために飼育し、この「命」をいただいて生きています。どんな時期にどのような教材でどのように教育するか、かわいい、かわいそうと言う観点だけでなく飼育を通じて食の生産と消費の過程を食物連鎖の一環として理解させることが重要であると考えます。



鶏の食肉内臓検査

## 5 人と動物の共通感染症と予防法の基礎知識

動物由来感染症による被害の程度は原因となる病原体と感染動物の種類により大きく異なります。人と動物の共通感染症は現在約 150 種が知られています。病原体としては、ウイルス（狂犬病、口蹄疫）、リケッチア、クラミジア（Q熱）、細菌（ペスト、パストレラ、サルモネラ症、レプトスピラ症）、寄生虫（コクシジウム原虫、エキノコックス症）、真菌などがあります。これらの病原体の中には、エボラ出血熱などのよう

に病原性の極めて強いものも含まれますが、それほど病原性の強い病原体でなくとも、感染した人の健康状態あるいは免疫状態によっては重篤な症状を示す場合があります。また、病原体を保有している動物自体が無症状である場合もあります。学校飼育動物の場合、成人に比べると抵抗力の弱い児童が動物の飼育や世話を担当している為、特に人と動物の共通感染症に対する十分な認識を持つ事が必要になります。

人と動物の共通感染症を発病の程度により、狂犬病、ブルセラ病や炭疽のように動物と人の両方に重篤なもの、牛、豚の口蹄疫、鳥類のニューカッスル病のように動物には重篤であるが人に軽微なもの、Q熱やダニ脳炎のように動物には軽微であるが人に感染すると重篤な症状を示すものに分類することができます。

### ●人と動物の共通感染症の予防対策

①過剰なふれあいは控える。（口移しで食物を与えない）

細菌やウイルスなどが動物の口や爪などにいる場合があるので注意する。

②動物を触る前後に手を必ず洗

う。病気の予防のために手を洗う習慣をつける。

③動物の身の回りは清潔に保つ。

飼っている動物はブラッシングや爪切りなど、定期的に手入れをして清潔を保つ。

④糞尿はすみやかに処理する。

⑤掃除はこまめに行い、糞尿は気がついたらすぐに処理する。

⑥動物も定期検診を行い、病気の早期発見をするように努める。

⑦体に不調を感じたら、早めに受診する。（体調が悪い時は動物と長時間接しない）



## 6 飼育動物の管理と健康

(1) 日常管理の仕方

①給水：毎日水飲み容器をきれいに洗い、新

鮮な水を十分に与える。

- ②給餌：食器をきれいに洗い乾燥させる，毎日動物に適した餌と，食べきる必要量を与え残った餌はその都度片づける。
- ③清掃：飼育舎は，毎日掃除をして清潔にしておき，汚い所や，じめじめした場所では，動物が病気に罹りやすくなるので，床がぬれていたら掃除をして出来るだけ早く乾かす。
- ④手入れ：全身をブラシでとかし，定期的にシャンプーをする。
- ⑤飼育舎の環境と構造：施設環境条件として飼育舎と運動場，給排水設備，手洗い場の完備，触れ合い広場を併設する。飼育舎は，日当たりの良い所で子どもの身近な場所に設置し，動物が逃げられない対策と外部より犬猫，野鳥，ネズミ，ヘビ等が侵入できない工夫をし，雨が吹き込まない構造が良い。
- ⑥温度管理：動物は厳しい暑さ寒さには弱く，夏は日陰になる場所を作り，風通しを良くし，冬はそれぞれに巣箱を用意して隙間風を防いでやる。梅雨の時期は湿気に気をつけ風通しを良くする。
- ⑦砂浴，水浴，沐浴：外部寄生虫や付着した異物の除去，健康維持，病気の予防に繋がる。

#### (2) 動物の健康管理

動物飼育管理に携わる前に動物の生態や習性を理解しその動物が本来の生活形態や（昼行性，夜行性，樹上生活，地上生活，単独行動，群行動など）餌の給餌方法（肉食，雑食，草食）を理解しておく必要があります。動物の中には病気になっても具合の悪さを隠そうとする習性があり，そのため変だと気付いた時には手遅れで，あっという間に死んでしまうケースも見られます。日頃から良く観察し，早期の発見，早期治療が重要です。少しでも異常が見られた時は，速やかに獣医師に相談して下さい。

#### ①健康チェックのポイント

- ・元気で活動的か，食欲の有無
- ・鼻水，涙，眼やにの有無
- ・毛並み，羽毛等に汚れ



や異常の有無

- ・爪や歯の過長
  - ・糞尿の状態はどうか，下痢の有無
  - ・体重の変化や行動，動作の異常
  - ・体に傷や腫れの有無
  - ・羽を膨らませたり，うずくまっていたりしないか
- ②病気を防ぐポイント
    - ・餌や水を毎日きちんと同じ時間に与える
    - ・飼育舎はいつでも清潔にしておく
    - ・運動不足やストレスをかけない
    - ・定期的に広い場所に出して適度な運動をさせる
    - ・温度や湿度の維持



## 7 獣医師支援による飼育を楽しくするための改革計画について

### (1) 飼育目標と飼育計画の実践

新学期に向けて飼育動物に対する学校の教育方針を考えましょう。学校の動物はどのような目的で飼われているのだろうか。教材飼育，展示飼育，家畜飼育，愛玩飼育，動物介在教育飼育なのか，その目的に沿って，学校の動物をより有意義に活用するために飼育の目標と年間の指導案を考え，動物種の習性と特徴を理解し，楽しい飼育に改革したいものです。

#### ●飼育目標と指導案の計画

- ①仔ウサギや卵を計画的に産ませ，育て，誕生と成長について考えてみる。
- ②生きるための食文化（鶏の卵を例に食物連鎖）について考えてみる。
- ③糞を使って植物を育てるリサイクル方法を取り入れてみる。
- ④オスとメスの身体と習性の違いを考えてみる。
- ⑤動物の生活と手入れの仕方について，自分の生活に置き換えて考えてみる。

### (2) 獣医師と連携

新学期が始まったら，学校に獣医師を呼んで早めに飼育について相談しましょう。

世話の仕方、動物の扱い方、雄と雌の違い、飼育環境での工夫のしかたや、飼育の負担を軽減するヒントが見つかると思います。その他たくさんを一緒に考えることができます。地域の獣医師会や動物病院と連携し飼育管理指導と病気治療の対応をお願いすることも必要であると思います。

#### (3) 名前をつけよう

個体識別は飼育の第一歩です。先生方は、子どもが何十人いても顔と名前が一致すると思います。動物も必ず名前をつけると良いでしょう。どの動物にどんな名前が付いているのか、学校のみんなが分るように写真(似顔絵)を貼って、名前を書いて飼育舎やケージに表示すると共通認識が持て親しみや愛着が増していくと思います。自分たちの名前の由来を考えてみよう。

#### (4) 観察をしよう

名前がついたら1日2回は、1頭ずつ身体を触って観察し飼育日誌を作成すると良いでしょう。長い時間でなくてもよいので、体に傷や汚れがないか、餌は食べているか、元気があるか、便の様子はどうか、その動物の健康なときの状態を知ることが病気を早く知る一番の方法です。

#### (5) 飼育委員会の動物から学校の動物への改革指導

飼育委員会の児童が、世話に慣れ、動物との付き合い方をマスターできたら、飼育についての発表会などを開催し、飼育舎や動物を全校の児童に開放し、動物とのふれあい方、抱き方など、下級生と上級生の交流会として実施すると楽しいふれあい活動ができます。

#### (6) 教室における動物飼育の勧め

動物には、我々を和ませてくれる効果の他にも以下のことがあげられます。

- ①動物を介したコミュニケーションと人格形成に役立つ。(友達、先生、家族と動物の事を話す、など)
- ②相手の態度や、気持ちに注意が向くようになる
- ③生や死、健康や病気などの実体験をする命の学校
- ④遊びや話の相手
- ⑤自然や科学への入り口など、他にも多く

の効果があると考えられます。

しかしこれらは、子どもが、動物と愛情を交し合い、これを繰り返す(子供が動物をかわいいと感じる→世話をしてあげる→動物が元気にしている、近づいてくれた、かわいいしぐさをした→また、かわいがりたい)ことによって、実際の効果が出てきます。

教室内や、クラスの近くの場所でかわいい動物を飼育してみましょう。自分たちの動物として、より身近なところで世話をすることにより、子どもがより多くの実体験や刺激を受けることができます。実際に教室内で飼育を行い、「クラス内のコミュニケーションが取れ雰囲気や和やかになった。動物や友達を気遣うようになった。落ち着きがでたようだ」などと、感じている事例が多いようです。

毎日の世話、匂い、汚れ、アレルギーの子ども等、不安を感じる所もありますが、教室内飼育の重要性と意義目的を学校と保護者が理解し、アンケート調査等を行い、獣医師との連携で実施してみると意外と問題は少ないようです。長期休暇に、子どもが家庭に動物を持ち帰り世話をしているクラスでは、世話をする順番の予約が一杯なほどの人気です。

#### (7) 動物種の導入方法

新規に動物を導入する場合、その飼育目的と対象年齢に合った動物種と雌雄、飼育頭数を決め、純粋種の導入を考えてみましょう。純粋種導入の場合獣医師と相談し、国や県、大学等の研究機関や動物商等から導入することができます。また、純粋種の飼育の利点は性格や形質が一定していますので、目的に合った動物を選択しやすいと思います。

#### (8) 休日の対応

休日の動物の世話をどう行うかは、学校で飼育していく上で大きな課題となっています。動物を飼育する最低条件として毎日の世話と最後まで飼うことが飼育する人の責任です。また、学校飼育動物の存在が「学校の大切な仲間」として愛情と責任を持ち小さな命を大切にすることを子どもに伝えることが大切です。その為には地域住民と保護者が協力して対応を考え連携してこと

が必要です。

対応例

- ①当番制で家庭に持ち帰り、飼育体験を通じて動物の生活と習性を理解する。
  - ②飼育体験を理科、道徳、総合学習で取り入れ、地域住民の協力と理解を得る。
  - ③親子飼育活動として当番制で学校の飼育活動に参加する。など。
- (9) 飼育の引継ぎを忘れずに

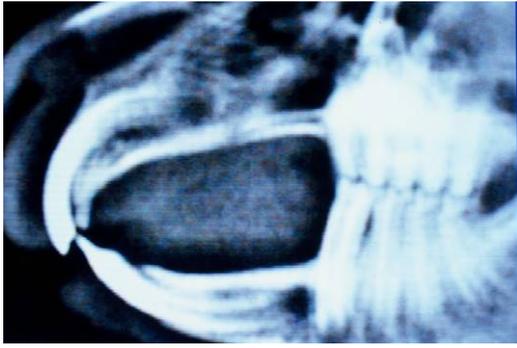
引継ぎを忘れた事例. ある学校でウサギが1匹もいなくなってしまう、飼育相談を受けた獣医師が、無計画な繁殖をしないと約束で去勢手術を行ったオスを1羽と、メスを2羽学校に寄付したことがありました。その年は何事もなく、3羽のウサギたちも健康に過ごしました。次の年、新しく赴任された教師が、仔ウサギがないのは寂しいと他校からオスを1羽もらって一緒にして飼いました。その後、ウサギはあつという間に繁殖を始め、産室が無く仔ウサギが死亡することもあり十数羽から増えることはありませんでした。ところが、その3年後の担当教師と飼育委員はとても面倒見がよく、妊娠したウサギを確認し隔離して産室を作りよく世話をしました。ウサギはたった3ヶ月で36羽に増えてしまいました。新年度、新しい飼育担当の教員は獣医師に、「増えすぎて困るので、オスを全頭で16羽を去勢してほしい」と依頼の電話を掛けました。

飼育担当になられた教師は、動物の好き嫌いにかかわらず、飼育委員の指導をし、動物の世話を一生懸命やっています。休日も学校に行き、動物の面倒をみている熱心な教師もたくさんいます。飼い方や飼育管理指導に悩みも多いようで相談もよく受けます。ところが、次の年に飼育担当になられた教師も同じようなところで悩み苦労をしているようです。施設の改善等は、1年だけでは解決しない問題も見受けられますが、是非、引継ぎをしっかりとって次の教員の苦労を少しでも軽減し、同様な例を引き起こさないようにしてください。このような体制の不備が学校飼育動物の課題を大きくしていると思われます。

おわりに

動物ふれあい教室を行って子どもたちに「ウサギに触ってどうだった？」と聞くと、「かわいかった」「暖かかった」「ふわふわしていた」などの答えが返ってきます。また、「ウサギの耳はなぜ長いのか？」とか「目の位置が人とどうして違うのか？」など人との体の違いに気付くことも多く、なぜそうなっているかを説明すると、子どもだけではなく大人の方も強い関心を持ちます。聴診器で心臓の音を聞き比べ、その音に驚いたり、小さな動物のお母さんが子を産み育てるのを観察し感動したり感心しています。我々にとって身近な動物とふれあうことは、命の不思議さや、神秘性、多様性などを知る第一歩であると考えています。

子どもたちには家庭で愛されている動物（ファミリーアニマル）や学校飼育動物などの身近な動物の他にも、人が暮らすために役に立つ動物（ウシやブタなどのフードアニマル、盲導犬、救助犬など）がいること、また、たくさんの野生動物が我々人間と同じ地球上で暮らしていることを知ってほしいと思います。これらの動物はそれぞれ「種の保存」のため、群れやなわばりなどの秩序を持ちながら、お互いに関わりあい、地球という生態系を維持しています。人間が地球上の生き物の頂点にいるという考え方があり、確かに人間は他の生き物の生活環境を変え、生態に大きな影響を与える力を持っています。その大きな力をどのように使ったらよいのか、身近なところから考えさせて下さい。人間に飼われるようになって動物の生活はどう変化したのか、人間は一人では生きていけないし、人間という種だけでも存続できないでしょう。動物たちは、私たちが生きるために必要な「食料」や「やすらぎ」を分け与えてくれます。私たちが、これからも地球で幸せに生きていくには、地球上の限られた資源と環境を大切に、他の命と共生していかなければならないと感じています。子どもたちは、学校飼育動物とのふれあい体験を通じて、生命の尊さを知り、人間には地球上のリーダーとして大切な役割があることを学習してほしいです。動物や植物の言葉を我々は理解することができませんが、そこで何かを感じ取る心が



ウサギの頭部レントゲン写真

大切になると思います。この「感じ取る力」こそが「思いやり」に繋がります。IT化など社会生活の大きな変化の中で少子化も進み、大人でさえ自己中心的な人が増えているといわれています。子どもたちには飼育動物を通じて、相手の気持ちを感じ取る心の大切さを理解してほしいものです。自分ができることは何かを考え、自ら行動することは素晴らしいことです。それは、やがて子ども自身を成長させ、「生きる力」を育むこととなるはずです。

飼育されている小動物は、清潔な飼育舎で、健康で人に良く馴れていて、子どもたちが心から触ってみたい、世話をしてみたい、かわいいと思える環境作りが必要です。ま

た、動物好きな指導者が身近にいていつでも気軽に相談できることが望ましいです。

動物を飼うことの意義を理解し、より教育的に活用していくことを期待しています。

(桑原動物病院どうぶつのウェルネスセンター院長)

#### 参考文献

- 1 群馬県獣医師会 (1998) 指導書「ふれあい」, 「ふれあい実施マニュアル」
- 2 桑原保光他 (2000・2003・2004) 群馬大学教育学部「新生活科研究」 群馬評論社 pp55-67
- 3 国立教育政策研究所「生命尊重の心を育む実験観察や飼育の在り方に関する調査研究」
- 4 桑原保光他 初等理科教育 (2003) 飼育栽培の楽しみ VOL37, NO6
- 5 教職研修総合特集 N0157 (2003) 「学校飼育動物と生命尊重の指導」 教育開発研究所
- 6 群馬県獣医師会 (2003) 指導書「ふれあい指導案」 電話 027-361-9241
- 7 日本獣医師会 (2002) 「学校飼育動物保健衛生指導マニュアル」
- 8 小学校学習指導要綱解説 生活科編 平成20年8月